

学位審査結果報告書

学位申請者氏名 戸谷 孝洋

学位論文題目 Examination for factors involved in oral health-related quality of life on the elderly requiring long-term care
(要介護高齢者の口腔関連 QOL に関する因子の検討)

審査委員 (主査) 柿木 保明



(副査) 藤井 航



(副査) 邵 仁浩



学位審査結果の要旨

近年、歯科医療のアウトカム評価において、口腔関連 QOL (Quality of Life) が患者立脚型の評価指標として重要視されている。この口腔関連 QOL は、口腔機能以外の要因からも影響を受けることが明らかになってきているが、特に要介護高齢者における口腔関連 QOL については不明な点が多い。そこで本研究は、要介護高齢者における口腔関連 QOL に影響する因子を明らかにすることを目的として行ったものである。

対象は特別養護老人ホームに入所中の要介護高齢者 48 名のうち、自記式調査に回答可能であった 18 名 (女性 15 名, 男性 3 名, 平均年齢 84.8 歳) とした。口腔関連 QOL の評価には Oral Health Impact Profile (OHIP) の短縮版である OHIP-14 日本語版 (OHIP-J14) を用いた。口腔に関連した項目として、アイヒナーの分類を用いた咬合支持域、山本式総義歯咀嚼能率判定表を用いた咀嚼能力、柿木の分類を用いた口腔乾燥の状態を評価した。全身状態の関連項目としては、日常生活自立度 (障害度, 認知度) を評価した。咬合支持域および日常生活自立度は数値変換後、各項目間の相関について重回帰分析にて評価した。

その結果、口腔関連の項目では、咀嚼能力は OHIP に対して負の相関を示す傾向が認められ、咀嚼能力が高いほど、口腔関連 QOL が良好であることを示していた。咬合支持域の評価および口腔乾燥度は OHIP 値との間に相関を認められず、咬合支持域と咀嚼能力との間にも相関を認めなかった。一方、日常生活自立度 (寝たきり度) は OHIP 値との間に相関を認めなかったが、日常生活自立度 (認知症度) は OHIP 値との間に有意な正の相関を認め ($r=0.717$, $p=0.0049$)、認知症度が高いほど、口腔関連 QOL は低い結果が示された。

今回、咀嚼能力と OHIP 値との間にある程度の相関を認めたことから、要介護高齢者における咀嚼能力は口腔関連 QOL に関する重要な因子であることが明らかになった。また、咬合支持域と OHIP 値との間に相関が認められなかったことについては、咬合支持域の喪失が認められる被験者の多くは可撤性義歯を使用していたため、天然歯の咬合支持域が減少しても補綴装置によって咬合支持が回復され口腔関連 QOL が維持された可能性が考えられた。さらに、日常生活自立度 (認知症度) が高いほど、口腔関連 QOL が低下していることが明らかになり、認知症度の高い患者に対しては、積極的な歯科治療や口腔ケアの介入が口腔関連 QOL の維持向上に重要であることが示唆された。

公開審査会で研究方法と評価基準などについて質疑応答があったが、要介護高齢者における口腔関連 QOL の影響因子について有益なデータが出されたことは評価でき、またこれらの研究分野に関して十分な知識を有していたことから、審査委員会では、学位論文として価値あるものと判断した。